



シリーズ「遺跡を学ぶ」

076

新泉社

遠の朝廷

大宰府
〈改訂版〉

杉原敏之

遠の朝廷

（とおのみかど）

―大宰府（改訂版）―

杉原敏之

【目次】

第1章 古都・大宰府……………4

- 1 古都大宰府の風景……………4
- 2 風景の源……………7

第2章 大宰府の発掘……………13

- 1 大宰府政庁の発掘……………13
- 2 甦る大宰府政庁……………18
- 3 大宰府の成立はいつか……………23

第3章 軍都・大宰府……………28

- 1 国防の最前線・筑紫……………28
- 2 平野を遮断する水城……………32
- 3 巨大な朝鮮式山城・大野城……………39

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第4章 政都・大宰府……………47

1 大宰府の官衙・大宰府庁域……………47

2 大宰府条坊の復元……………57

3 古代都市・大宰府……………61

第5章 大宰府の栄華……………67

1 府の大寺・観世音寺……………67

2 大陸と西海の文化……………75

3 古代大宰府の終焉……………82

第6章 大宰府史跡……………86

1 先学者たち……………86

2 大宰府史跡の歩み……………88

参考文献……………92

第1章 古都・大宰府

1 古都大宰府の風景

現在、太宰府といえば、誰もが学問の神様・菅原道真とその霊廟である太宰府天満宮や周辺の古社寺を思い浮かべる。賑わいをみせる参道や周辺の風景は、さながら奈良や京都の縮小版であり、西国の古都とよぶにふさわしい風情を十分にかもしだしている。

そうした太宰府天満宮の参道前の通りをしばらく西へ進むと、次第に緑が増え、その先の大きな樟の森のなかに、観世音寺、戒壇院といった天平の古刹がたたずむ風景があらわれてくる。そして、さらに西へ進むと大きく開けた場所に出る。古代の役所、大宰府政庁の跡である。

そこでは、市民が集い散策する普通の公園と変わらぬ光景があるが、整然とならぶ礎石から、いにしえの建物の跡だとわかる。今日、都府楼とよばれるこの建物跡を、さらに奥へ進んでいくと、一段高いところに三基の碑とともにたたずむ巨大な礎石にたどりつく（図1）。

ほかに類をみない、ていねいに三段に削りだされた礎石は、秀丽とよべるだけでなく、たとえようのない威厳をどこか感じさせる。さらに、背後にそびえる大野城と重ねてみると、その感はいっそう強くなる。それは、この地が積み重ねてきた独自の歴史の重さなのかもしれない。

かつて、律令国家の西の拠点として、この地に置かれた巨大な官衙^{かんが}・大宰府は、西海道とよばれた当時の九州や周辺の島々を治め、さらに対外交渉の窓口として栄えた。そして、その実態を失った後も、古都大宰府の風景の源にあつて、生きつづけている。

それは現在、太宰府市域を中心に広がる、大宰府政庁や水城^{みづき}・大野城^{おののじょう}、さらに官衙や社寺など、古代大宰府の時代に造られた施設の跡であり、あわせて大宰府史跡と総称している(図2)。



図1 ●大宰府政庁跡の礎石と碑

正殿跡の礎石は平安時代の再建時のままで、柱座の径は60cmを超える。その上に建つ3基の碑、背後の大野城とともに大宰府政庁を象徴する景観である。



図 2 ●大宰府の位置

かつての筑紫の中心、福岡平野より十数 km 南となる四王寺山南麓の開けた場所に、政庁を中心とする古代大宰府の重要施設は置かれた。鴻臚館を外交の窓口として、玄界灘より続く海路によって半島・大陸とつながっていた。

2 風景の源

大宰府の成り立ち

大宰府は、東アジアの歴史と密接なかかわりをもって成立した。古くは、五三六年（宣化元）、那津に官家を修造して有事に備えた「那津官家」に、大宰府の軍事的起源を求める意見がある。ただし、記録に登場するのは七世紀に入ってからのことである。

『日本書紀』推古一七年（六〇九）、「筑紫大宰」は百濟僧の肥後国葦北漂着を報告した。これは、のちの大宰府の呼称につながる「筑紫大宰」の初見であり、外交機能の起源をこの時期前後に求める考えもある。

六六三年（天智二）の白村江の戦いは、大宰府機能の成立を考えるうえでの大きなできごとであった。朝鮮半島に百濟復興の援軍を派遣した倭王権（当時の日本）は、白村江で唐・新羅の連合軍に敗れた。この敗戦を契機として、水城、大野城、基肄城など、北部九州を中心に防衛施設が造営された（図3）。その後、壬申の乱の際に、筑紫大宰栗隈王が「筑紫国はもとより辺賊の難を成るなり」として、近江朝の援軍要請を断ったことから、この筑紫大宰が白村江敗戦以降に西海の軍事権を掌握していたことはたしかである。

六七三年（天武二）には、「筑紫大郡」で高句麗使邯子や新羅使金薩儒などを饗応した記録がある。天武朝以降、筑紫で外国使節を遇した記録が多くみられるが、あわせて「筑紫館」「筑紫小郡」などの存在から、那津周辺に饗客施設の整備も図られたのであろう。この筑紫で

外交を掌握したのも、筑紫大宰であつたと考えられている。

六八九年（持統三）の飛鳥浄御原令の施行は、大宰府の成立を考えるうえでも大きな画期となった。翌年には、「大宰・国司、皆遷任せしむ」として人事発令がおこなわれており、大宰府にかかわる機構の確立がうかがえる。

そして七〇一年（大宝元）、大宝令の制定によつて、吉備大宰などほかの大宰が廃止されるに及んで、令制大宰府が正式に発足したと理解されている。

律令制における大宰府

大宰府は、日本の古代律令制における地方最大の官衙である。

『養老職員令』大宰府条によれば、祭祀をつかさどる「主神」、長官である「帥」以下五〇名の官人が配され、書記の「書生」や下級役人の「使部」、雑用に従事した「仕丁」などを含めれば、大宰府に関係する人びとは一〇〇〇人に達したともいわれている。また、中枢である四等官の規模は、「帥」一人、次官の「大弐」一人と「少弐」二人、以下、「大監」二人、「少監」二人、「大典」二人、「少典」二人の計一二名で、中央官司の定員よりも多く、帥の相当位は従三位で、中央の八省の長官よりも上であつた。

大宰府のおもな機能には、外交儀礼、軍事、西海道を中心とする九国三島の統括があげられる。ただし、職員令に正式に規定された独自の職務は、蕃客、帰化、饗讌という外交儀礼に關するものだけである。



図3 ●大宰府と関連遺跡

白村江の敗戦を契機として、沿岸より奥まった地峡帯に、水城・大野城・基肄城などの軍事施設が造営される。その後、大宰府政庁を中心に都市が整備され、西海道統治と文化の拠点として、多くの官衙や社寺が置かれていった。